

## 日野の歴史と民俗132（詳細版）

# 大昔の環境を伝える貝化石

日野市内では、多摩川・浅川や多摩丘陵に、平山層・小山田層・連光寺層・稲城層という地層が見られます。それらの地層は上総層群かずさそうぐんに属し、海に堆積した砂や泥などで構成されています。その上総層群が堆積した頃、日野を含む関東一帯には海が広がり、その海も陸化したり海になったりと環境が変化していました。市内多摩川の河床からは、アケボノゾウの牙と足跡化石、「ヒノクジラ」と称するヒゲクジラ類の化石のほか、貝化石や植物などの化石が産出しており、遙か昔の別世界が想像されます。

浅川の平山橋下流には、河床の礫れきに覆われた平山層があります。この平山層は、川の流れや工事の影響で、時期や場所によって見えたり隠れたりしています。1992年から1994年にかけては、平山橋下流左岸河床の平山層は、非常に観察しやすい状況でした。ホタテガイ類の化石種が大きいこともあって目だっていたほか、灰色の砂泥層の中に白い貝片が交じり、容易に貝化石を見ることができました。郷土資料館では、その当時調査・採集された貝化石資料の寄贈を受けて収蔵しています。当時の調査によると、ホタテガイ類、イシカゲガイ、チヨノハナガイ、アラスジソデガイ、エゾタマガイなどの貝化石が多産したほか、100種近くの貝化石が確認されています。

平山橋では、二枚貝類が合わさった形のまま（合弁殻）のものが多く確認され、このことから、それらの種がこの場所に生息していたと考えられます。そして、化石の貝といっても現在と同じ種が多いので、現在との比較により当時の環境を推測することができます。海の深さや海底については、浅い海の砂や泥底に生息する貝が多く確認されています。水温はというと、現在の日本列島より南方から北海道より北方に生息できる貝が産出し、それらの貝の種類や数からは、その頃の平山橋地点は、現在の北緯38°～39°付近、仙台湾から三陸海岸あたりくらいの水温だったとも推測されています。また、穴のあけられた貝殻もあり、ツメタガイなどの貝が別の貝を食べるといふ、生々しい生存競争の物証も残されています。地層の中で静かに眠っていた貝化石が、およそ150万年前の海の様子を伝えてくれました。



企画展「七生丘陵の自然と暮らし2011」 平成23年4月9日～7月10日

平山の貝化石、アケボノゾウ、ヒノクジラの化石を展示しています。

会場：日野市郷土資料館（日野市程久保550）

（日野市郷土資料館 白川未来）

※広報ひの（平成23年5月15日号）にダイジェスト版が掲載されています。

日野市郷土資料館（042-592-0981）